

城倉 正祥

早稲田大学文学学術院

はじめに

早稲田大学は、龍角寺を継続調査してきた。1947・48・71・76年をⅠ期、2014年以降をⅡ期調査と呼称する。Ⅱ期は、2014年3月の測量・GPR（1次）調査、2014年4月の補足（2次）調査、2015年2～3月の発掘（3次）調査、を実施した。以下、現在までの成果を整理する。

1. 龍角寺の調査研究史

早稲田大学の滝口宏は、1947・48年に龍角寺を発掘して回廊の痕跡を追求し、奈良時代前期創建の法起寺式伽藍を想定した（滝口1949）。1971年には、金堂・塔・塔北方建物を調査した。現存する金堂基壇の下層で創建基壇を検出すると同時に、塔基壇の規模を確定した（千葉県教育委員会1971）。1976年には、金堂北（西）側を調査したが、講堂は検出できなかった。

1988年には、千葉県が寺域の範囲確認調査を実施した（千葉県教育委員会1989）。

1989年には、奉安殿南建物、旧二荒神社の造替に伴う発掘を多宇邦雄が実施した。旧二荒神社の発掘では、調査区東側でロームを掘り込んで形成された版築基壇の西端を南北10m分検出し、講堂の存在が指摘された（多宇1998）。多宇は仁王門も創建期の門址と考えたようだが、この点は岡本東三、山路直充も南門・金堂・講堂が南北に並ぶ伽藍を想定し、「変則的伽藍」（岡本1993p20）、「法起寺式と呼ばれる配置とは異なる」（山路2013p141）と指摘している。

2003年には、栄町が境内東側で寺域の広がりを確認し（栄町教育委員会2005）、2005年には、千葉県が鐘楼の北東を発掘して近世以降の建物

跡を検出した（千葉県教育振興財団2009）。

調査史を整理すると、滝口が想定した「法起寺式」から、岡本・多宇・山路が想定する「南門（仁王門の位置）・金堂・講堂が一直線に並ぶ伽藍配置」へと認識が変化した点が見える。近年の研究では、全国の法起寺式伽藍を集成した貞清世里が、典型的な法起寺式をA類、金堂・講堂が南北に並ぶタイプをB類としており、上記二者も法起寺式の範疇で理解できる（貞清2020a）。さらに、金堂が東面する観世音寺式が列島東西南北端に位置する鎮護国家的伽藍であるのに対して、法起寺式は在地仏教の基盤として普遍的に伝播した点が指摘されるなど（貞清2020b）、伽藍配置の研究も新しい段階に進みつつある。現存遺構からの判断には限界もあるが、創建時の龍角寺の伽藍配置を整合的に理解するための調査が必要である。

なお、滝口が想定した典型的な法起寺式A類、岡本らが想定したB類に対して、貞清は龍角寺を講堂がないC類とするが、講堂の有無・位置は現段階では確定できていない。厳密に言えば、創建金堂の向きも不明で、観世音寺式の可能性も残る。埴伝で関係性が想定される結城廃寺（結城市教育委員会1999）の存在からすれば、法起寺式伽藍である可能性は高いと考えるが、龍角寺の歴史性を考究する上で、創建期の伽藍配置の追及は最優先課題といえる。

2. 測量・GPR（Ⅱ期1・2次）調査

境内の現況把握のため、測量・地中レーダー（GPR）探査を実施した（城倉2015）。1932年の「龍角寺境内略図」（廣岡1933）、1971・88年の測量

図（千葉県教育委員会1971・1989）より詳細な10cm等高線図を作成し、金堂・塔・鐘楼・龍神宮・仁王門の礎石も実測した。また、各遺構毎に、GPR・磁気探査も行った。

測量・GPR調査によって、金堂・塔が東西に並び、その中間北側の龍神宮跡周辺に講堂と想定される大きな反応を確認した（「法起寺式A類」か？）。また、金堂北側・西側の現地形が、中心伽藍を圍繞する創建期の回廊の可能性が高い点も確認した。さらに、龍角寺境内の遺構が北で西側に傾く創建期の主軸から、近世にかけて徐々に真北に変遷した点も明らかになった。

3. 発掘（Ⅱ期3次）調査

金堂北側・西側の残存地形が、回廊かどうかを確認するため、北側に第1トレンチ、西側に第2トレンチを設定した（城倉ほか2017a）。

第1トレンチでは、北回廊の基壇と思われる盛土遺構（SM1511）を確認し、その下層で版築（SM1512）も検出した。基壇上では、直径1.7m・深さ1.9mの中世土坑（SK1508）を検出し、土坑内から常滑甕・宋明銭・板碑・宝篋印塔が出土した。基壇遺構の北側では、8世紀末頃の廃棄土坑（SK1501）を検出した。土坑内からは灯明皿として使用された大量の土師器・須恵器坏、瓦、勾玉、埴仏（城倉ほか2017b）が出土した。

第2トレンチでは、西側住職墓の造成に伴う中近世の盛土（SM1522）を確認し、その下層から創建期の軸線と一致する南北溝（SD1521）を検出した。南北溝は、古代の回廊基壇からの流土層を切り込んでおり、掘削後に人工的に埋め戻され、盛土された点を確認できた。トレンチ西端の下層からは、6世紀前半代の土器を伴う竪穴住居（SI1520）も検出した。

以上、金堂北・西側には中心伽藍を圍繞する回廊が存在した可能性が高い。金堂北側では、創建期の重弧文軒平瓦よりも新しい葡萄唐草文軒平瓦が採集できる点が知られていたが、第1トレンチ内でも出土し、回廊（講堂）の造営が奈良時代前半まで下がる点が想定できた。また、北回廊と想定される基壇の北側で検出したSK1501の廃棄年代が8世紀末頃と想定できる

点、二荒神社北側の谷地で火災による被熱痕のある瓦が多く散布する点（服部1932）も考慮すると、8世紀末段階では回廊（講堂）が既に機能していなかった可能性も考えられる。

なお、第1トレンチの基壇状遺構を講堂の一部と考える説も完全には排除できないが、龍神宮部分で検出した大きなGPR反応を講堂と考えるのが現状では最も整合的な理解である。

おわりに

Ⅱ期調査で、創建期伽藍の様相と中世～近世の境内の変遷が明らかになってきた。一方、未解決の課題も山積している。当面は北回廊の構造把握と講堂の位置特定が優先課題である。

引用文献

- 岡本東三1993「下総龍角寺の山田寺式軒瓦について」『千葉史学』22
- 栄町教育委員会2005『栄町埋蔵文化財集報—平成15年度—』
- 貞清世里2020a「法起寺式伽藍配置をとる古代寺院の集成」『西南学院大学博物館研究紀要』8
- 貞清世里2020b『古代寺院伽藍配置の意義—観世音式・法起寺式伽藍配置をとる寺院とその展開—』西南学院大学博士学位請求論文
- 城倉正祥2015「下総龍角寺の測量・GPR（Ⅱ期1・2次）調査とその意義」『仏教文明の転回と表現』勉誠社
- 城倉正祥ほか2017a「下総龍角寺の発掘（Ⅱ期3次）調査—遺構編—」『プロジェクト研究』12
- 城倉正祥ほか2017b「下総龍角寺（Ⅱ期3次調査）出土の埴仏」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』62
- 多宇邦雄1998「龍角寺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3（奈良・平安時代）』千葉県
- 滝口宏1949「下総龍角寺址調査」『史観』32
- 千葉県教育委員会1971『下総龍角寺調査報告書』
- 千葉県教育委員会1989『栄町龍角寺確認調査報告書』
- 千葉県教育振興財団2009『栄町龍角寺跡』
- 服部勝吉1932「龍角寺塔心礎と古瓦」『寶雲』4
- 廣岡城泉1933「下総國龍角寺」『新更』4-1
- 山路直充2013「龍角寺創建の年代」『古墳から寺院へ』六一書房
- 結城市教育委員会1999『茨城県結城市結城廃寺』